

「僕」の亡霊たち：村上春樹「鏡」論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西田谷, 洋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19623

「僕」の亡霊たち — 村上春樹「鏡」論 —

西田谷 洋

一 はじめに

亡霊に出会ったとき、人はなぜ恐怖するのだろうか。

亡霊とは、あちら側からこちら側に到来し、かつて存在していたものが到来する点で再来するものである。また、亡霊は、今は存在しない者の記憶を前提に成立する記憶の現れ方ともいえる。能動的に思い出す回想・想起に対し、亡霊的な記憶は意図的に制御できないものとして現れる。亡霊は主体が望まないのに現れて取り憑くのである。取り憑かれることは苦痛や悲しみを伴い、憑かれた主体は、平穏な関係性から逸脱する。主体に制御できない亡霊のメッセージは決定不能な謎であり、亡霊と対峙することで主体を取り巻く現実はいま直される。

ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』（藤原書店二〇〇七・九）は、こうした取り憑くことで存在⇌現象⇌到来する亡霊のモチーフを利用し、今日では広範な影響力を失ったマルク

ス主義を活性化させるべく、マルクスの精神⇌可能性への回帰として死者を延命・復活させる。また、マルクス主義革命の指示や情念は超越的な他者から一方的に示されるだけで、これはメディアや宗教を持つバイザー効果と等しい。さらにデリダは、問題解決をメシアニズムなきメシア的なものによる救済に見いだすが、マルクスの亡霊は資本主義体制に亀裂を生じさせるものの体制変革の理論化はされてはいない。『マルクスの亡霊たち』は、現代の宗教的なものの回帰に対応し、「メシア」概念に頼らざるを得ない点にキリスト教・ユダヤ教の思考の枠組みに依存するという限界を持つ。デリダの亡霊概念は体制に寄生し、体制の変質を目指しつつも体制の永続が前提なのである。しかし、そうした限界性はあるものの、超越的な他者との遭遇をめぐる倫理的・社会的・政治的な考察を亡霊概念を用いて行うことは可能である。なぜなら、村上春樹のテクストは憑き物

を題材とする事が多く、個人的な日常の裂け目から現れる非日常的な力の発現としてそれらは描かれているからである。わけでも、取り憑くものが生物学的な死者ではない村上春樹「鏡」こそは亡霊の幽霊とは異なる亡霊性を検討するにふさわしい。

既に石橋紀俊氏は、反復(不)可能性の観点から、存在論が前提とする時間の線状性と起源を批判する亡霊の憑在論を展開し、「僕は語りの場に集うみんなに対して「主人」であるとともに、「みんな」に取り憑いている亡霊を招き寄せ、歓待する「主人」でもある」という極めて卓抜な分析を行う。

ただし、亡霊は「僕」のもとには再び訪れてはいないようである。本稿では「鏡」の亡霊の起源を問うことで亡霊の単発的出現の理由を検討すると共に、やはり亡霊が偏在性を伴うことを明らかにする。

二 亡霊のフレーム

「鏡」では、語り手の「僕」の家に集まった者たちが「順番にそれぞれ怖い体験談」を語る。これは、話の場の参加者が話し手の話を聴くという巡物語・百物語の構図であり、話し手の話が話の場に埋め込まれた額縁構造である。春樹テクストには同種の形式に「七番目の男」があり、巡物語・百物語では、聴き手の様子や話し手の反応が示されることで枠の中の物語はリ

アリテイを持つ。また、聴くことによる語りへのリアリティの保証・構築は「回転木馬のデッドヒート」や「アンダーグラウンド」等でのインタビュアー・「聞き書き」形式にもつながる。巡物語では、話し手の話はそれぞれ個別の現実を伴い、人々は話を聴くことで種々の現実が自分自身の現実と接続しうるものであることを確認し、それは読者の現実にも結びつくのである。百物語の恐怖は、巡物語の形式が持つ物語世界内と現実世界との接続機能によってもたらされる。

また、「僕」は、怪談を幽霊のような生と死の二つの世界がクロスするタイプと、予知や虫の知らせ等の超常的な感覚のタイプとに整理し、話の場で話された内容がどちらかの分野に分類できるとした上で、いずれにも「適さないって人もいる。たとえば僕がそうだね。」「僕という人間は幽霊だっけ見ないし、超能力もない。なんというか、実に散文的な人生だよな。」と語る。ここでは、「僕」は、みんなの話のタイプを二項対立として図式化し(a…幽霊/b…虫の知らせ)、自らをその例外事項として掲げる(A…みんなの話/B…「僕」の話)。また、「僕」の人生の平凡さを語ることで別種の人生を喚起する(a…散文/b…韻文)。

しかし、額縁は本編の解釈フレームであるが、本編は額縁のフレーム規定を相対化する。「僕」の話の場合、二つの世界の

クロスは経験したことはないし超常的な感覚もないという「僕」の言明に反し、本編では「僕」は鏡の世界とのクロスを鏡の中の「僕」とのコンタクトを通して経験して異常の発生を予感している。また、「散文的な人生」は、韻文（詩）的な人生と對比されうが、平凡でリアルな日常と共に劇的でロマンティックな非日常も「散文」カテゴリーは語りうる。「僕」の話は、非日常的な出来事をロマンティックに語る「散文」なのである。さらに言えば、虫の知らせや予知と幽霊とは厳密に区別できるのだろうか。いずれも合理的には説明不能な現象であり、虫の知らせや予知の能力は「今・ここ」とは異なつた時間空間にアクセスするものであり、幽霊は霊的感能力に優れた者が見ることができると捉えることもできる。

こうして額縁が規定する a/b、A/B、 α/β の二項対立は、本編の語りや百科事典的知識と呼ばれるテキストの文化的コードによつて崩され、全面的ではなくとも $a \parallel b$ 、 $A \parallel B$ 、 $\alpha \parallel \beta$ のように表面的には対立する二項が通底する部分を持つ。実態に反して語る「僕」は信頼できない語り手ともいえ、「鏡」では二項対立の設定とその変質あるいは両項の通底を示す二項対立自体に再帰・言及する図式がテキスト全体のフレームを構成しているのである。

一方の項だけでは世界が成り立たずに、もう一方の項との力

の関係性によつて世界が創られており、そうした関係性・力学のメディアとなるのが亡霊であるとすれば、「鏡」のフレームとは亡霊のフレームなのである。

三 反体制という体制

「鏡」は、一九八十年代半ばに「三十何」歳となつた「僕」が、「六〇年代末の例の一連の紛争の頃」、「なにかといえは体制打破という時代」に高校を卒業してから「大学に進むことを拒否して、何年間か肉体労働をしながら日本中をさまよつていた」、その「放浪の二年めの秋」から「二ヶ月ばかり中学校の夜警」をした出来事の回想が物語内容となつている。

体制ではなく体制打破、進学ではなく肉体労働、定住ではなく放浪を続けていた当時の「僕」の軌跡は、体制秩序とは別の可能性を喚起する点で亡霊である。

夜警、宿直代行員は、異常や不審者を発見し秩序を維持することが仕事である。渡邊氏は、「僕」が「反体制の態度を取りながら、実はドロップ・アウトしたにすぎず、義務教育という体制そのもの場でアルバイトするといふ体制のおこぼれにあずかつている」と指摘する。確かに、「僕」は自分を正しいと認め、不審者を「寝込みを襲」うかもしれない「変なもの」と見なし、「木刀を持って学校をまわる」のである。一方、「闇

入者のように振る舞っていたのは僕自身^⑤」であり、「僕」は、夜間の見回り「以外は音楽室でレコード聴いたり、図書室で本を読んだり、体育館で一人でバスケット・ボールをしてたりして」いた。夜警の排除対象者の行為と夜警の行為がここでは類似している。「僕」は学校という場にはふさわしくない行動をすることで、学校という場の秩序を建物の内部から攪乱している。とすれば、中学校で夜警をする「僕」は、体制打破と体制従属という「矛盾に対しても無自覚^⑥」なのではなく、もともと体制に屈服・従属する行為体と体制に抵抗する行為体との両面を持つ主体として捉えるべきだろう。「僕」は体制打破・逸脱をめざしつつ、体制を維持・構築するのである。

夜警の仕事は、九時と三時に一回ずつ三階建て校舎の教室や職員室、体育館、講室、プールなどを見回るといふものである。

見回るチェック・ポイントは二十くらいあって、歩いてひとつひとつそれを確かめ、ボールペンでOKサインを用紙に書き込むんだ。職員室——OK、実験室——OK、てぐあいだね。もちろん用務員室に寝転んだままOK、OKつて書いてる。でもそこまで手は抜かなかつたよ。

「僕」は夜警の仕事をチェックリストの確認することと捉えている。このチェック項目は公の学校管理のために定められたものであり、「僕」は公的な指令を夜警として代行していく。

そして、他者の定めたチェック・ポイントを確認し「僕」がチェックリストを満たす限り、中学校の空間は安定した日常の秩序・体制を作り上げる。チェックを満たすとは、世界を反復可能な規則性として捉えることである。連日のチェックの反復という慣習実践が日常の可変性・可塑性を制御し、自動化された安定した体制を構築・維持していく。反体制は、体制逸脱の志向で規則化されることで体制を補完するものとなり、二項対立とその通底というフレームと対応する。

人生もまた同一の慣習実践の反復でもある。人生で決まったレールの上を走るとは、他者が定めたチェックを満たすことに疑問を持たないことである。「僕」の人生も、「もう一度人生をやりにおすとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。そういうもんだよ」と反復の選択として回顧される。

事件の発生した午前三時の見回りも例外ではない。「僕」は、「嫌だな、見回りたくないな」と思うが、「一度ごまかすと、その先何度もごまかすことになるからね」と決心して見回りに行く。行動パターンとは、個別局面での選択の傾向がその人全体の選択傾向として類似・反復することから見いだされる。

ただし、ごまかしは反復することも、しないことも可能である。たとえば、「二度あることは三度ある」と「三度目の正直」とは反復の持続と終了を示す矛盾した諺である。反復とは選択

肢の片方であつて、その反対も選択肢としてある。そもそも、今まで採用したのとは異なるチェック・ポイントもまたありうる。「僕」が主体的に選んだ反体制の生き方は、「なにかといえば体制打破という時代だった」という述懐が示すように、「時代」と概括される他者が定めた反復する体制でもある。したがつて、「僕」には別の生き方も可能であり、そうした可能性が当時の「僕」に亡霊的に憑依しうるのである。

四 空間と主体の変容

亡霊の憑依はそれまでの（反）体制の枠内で生きようとする者からすれば不条理な事件である。しかし、特異な出来事が成り立つ前提がないわけではない。不条理な出来事は反復される規則的な日常との対比によつて不規則的は振る舞いがなされる特異点となるが、その日常が既に異常に包まれていたのである。

その事件が発生したのは「十月の風の強い夜」である。「どちらかというとし暑いくらいの感じ」で、「夕方ごろからやけに蚊が多く」、壊れた仕切り戸が「一晩中」「風にあおられてばたんばたんとうるさかった」。いつもとは違う台風の接近に由来する音響と温度と生物活動が日常空間を変質させていたのである。問題の午前二時では、それはより顕著である。「風はますます強くなつて、空気はますます湿っぽくな」り、「あい

かわらず」続いていた仕切り戸の音は「何かしらさつきとは違うような氣」がする。このため、「僕」は「なんだかすこく変な氣」になり、寝起きの良い平生と違い「起きたくない」と思う。こうした空間の変調、主体の失調が亡霊を招き寄せる。

しかし、そもそも夜警をする「僕」の有様が亡霊的であつた。また、体制の側の正当性・規則性と等しく反体制にも正当性・規則性があり、昼夜にはそれぞれ図と地が存在する。こうした秩序の相対的な二項対立の中で、「僕」という主体は両側を通じて通底させる。なぜなら、「僕」は、夜警という行為体と不審者という行為体の融合した主体である。また、学校空間は、昼の間では生徒や教師が図となり夜警は背景であるが、夜においては教師・生徒が後景へと退き夜警が前景化する。こうした秩序の転換の場として夜の学校があり、その場に存在する主体にも変容がもたらされる。

戸は頭の狂つた人間が首を振つたり肯いたりするみたいな感じでばたんばたん開いたり閉じたりしていた。すこく不規則なんだ。うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……
つていった感じだよ。

その夜の仕切り戸の不規則な音響は、中学校の空間を体制・反体制の規則性とは異なる秩序へとゆるがせる。見回りで「何も起こらなかつた」・「何もかもちゃんとあるべき場所にあつ

た」という「僕」の認識は、何かが起こる、何かがあるべき場所ではない場所にある」という事態生起を前提とした認識なのである。また、三時の時点で起きたくないと思つた「僕」の状態は、「体が起きようとする僕の意志を押しとどめてるような感じ」として語られる。「僕」の主體的な意志によつては「僕」の身体が制御できない事態は、心と体の分裂を意味し、亡霊による「僕」の体の支配の契機たりうるだろう。

かくて亡霊が「僕」に憑依するための空間的・主體的な変容が成立する。

五 鏡像の亡霊

見回る「僕」は、突然「暗闇の中で何かの姿が見えたような気が」する。それは、昨日まではなかつた鏡に「僕の姿がうつっていただけ」であり、「僕」は「ぼつとする」。しかし、「僕」は、「外見はすっかり僕」である「鏡の中の像は僕じゃない」ことに気づく。鏡の中の「僕」は、「僕以外の僕」であり、「僕がそうあるべきではない形での僕」である。それは「僕」に対して「固い氷山のような憎しみ」を向けるように、当時の「僕」すなわち「僕がそうあるべき」である「形での僕」とは対照的で、その故に否定されるしかない「僕」である。

亡霊は、「僕」のもとに鏡像として現れた。亡霊は、そうで

あるべき正常に対してそうあるべきではない不気味なものをおく。レイ・アルチュセールは人は大文字の他者から呼びかけられ応えることで主体となるという呼びかけ構造を説いた。大文字の他者とはキリスト教圏では神であり、一般的には国家体制や社会でもある。「僕」という主体は様々な呼びかけとそれへの応答として構成された運動体である。この場合、鏡の中の「僕」は、反体制的な生を送る「僕」を否定する点で体制側のかくあるべき「僕」という巨大な社会的圧力である。

僕の体は金縛りになつたみたいに動かなかつた。やがてやつこの手の手が動きだした。(略) 気がつくと僕も同じことをしていた。まるで僕のほうが鏡の中の像であるみたいになさ。つまりやつこのほうが僕を支配しようとしていたんだね。

「僕」は金縛りになり、自分の意志で自分を制御できず、鏡の中の「僕」によつて「僕」の動きが支配される。このとき、「僕」の身体は、社会的イデオロギーが「僕」を本来の体制に戻すべくヘゲモニーを「僕」から奪おうとした体制と反体制の抗争の場となるだろう。だが、呼びかけには応えることも応えないこともできる。もちろん、選択可能性は対称的ではなく、体制的な圧力を拒絶することは多大な労力を要する。だからこそ、「僕」は「最後の力」で鏡を割ることで体制打破の主体として呼応し、体制側の主体になれという呼びかけを拒否する。

「というわけで、僕は幽霊なんて見なかった。僕が見たのは——ただの僕自身さ」という事後の「僕」の概括は、「既製の『自己』に、徹底した念造り変えを迫る『他者』」ではなく、間隙をぬつて出現するイレギュラーな特異現象として「ただの僕」はあるのであり、「僕」という主体は様々な呼びかけとそれへの応答として構成された行為体の集合・運動体であることを意味する。むろん、社会的規範等のイデオロギー・力はある時点で拒否できたとしても、その都度作用しうるのであり、回復可能である。したがって、亡霊が「僕」に再来しないとは限らない。

六 境界を考える

「僕」は亡霊と遭遇した場を逃れ、翌日確認するとそこには元から鏡はなかった。特異点に生じる鏡は、「僕」が呼びかけを拒否することで特異点ごと消失してしまう。鏡は、実在するのではなく、特異点という、「幾重にも重なる不在と存在のあい目」^⑩、日常と非日常との間の揺らぎとして現象する。亡霊は、ありえたかもしれない自分を封印した日常の切れ目から出現する。亡霊は、「僕」の一部であつて一部ではない。言い換えれば、亡霊はこちら側でもあちら側でもない境界的なものである。亡霊は「閩の経験までも変状させ、(略)閩の可能性

を出現させる」^⑪。

さて、中学での亡霊体験を話し終えた「僕」は、場の聴衆にこの家には鏡が一枚もないと告げる。鏡は、亡霊の「僕」が出現するための媒体である。「僕」の家に鏡がないのは亡霊が再来するのを避けようとするほど「僕」の恐怖が強いからである。もつとも、亡霊の「僕」が出現したのは鏡が存在しない場所であり、何もない場所に亡霊は到来しうる。亡霊は「もてなすもの——いまでもてなすものではなく、招き入れる力を持っていない」を不意打ちし(略)正当性を認められた我が家を、限界づける境界線そのものを、問いたださせる^⑫「ほどであり、亡霊は中学ではなく、この家に、客である聴衆に、そして読者のもとに到来しうる。とすれば、「僕」がしたようにな鏡を置かないことでは亡霊の再来は防げない。

もちろん、怪談は話し手がその出来事を実在であるかのように語る様式であつて、実際にその出来事が発生したかどうかは別の問題である。ここから高比良直美^⑬・原善^⑭各氏は「僕」が聴衆を楽ませ怖がらせる工夫をしている、つまり亡霊を演出したのだと説く。なるほど、語り手統御の原則からすれば、語りの現在の時点から境界のゆらぎの表現は怪談を語るという目的のために最適化される。ただし、こうした解釈は作家が虚構を作るモデルであり、そこでは亡霊体験があつた「かのように

に」(5)語られる演出として理解される。しかし、亡霊体験があった」として」(6)語られる実在報告というモデルもこのテキストは許容する。確かに、原氏は「鏡」を「無かったものを在るように見せかける虚構の装置」である「メタフィクション」(7)として捉えているが、メタフィクションは語られた出来事、語る主体の審級を重層化していくのに対し、原氏はテキストが含意する以上の制約を課しているように見える。なぜなら、亡霊体験発生の真偽は「鏡」のテキスト内部では決定できず、実際に「僕」が亡霊体験をしたとも解釈しうるからである。

七 変化した「僕」

実際に「僕」が亡霊体験をしたと解釈した場合、鏡を置かないのは、「口に出しちゃうと同じようなことがまた起こるんじゃないか」と体験を話すことを長く避けたように、鏡を置くことで予め亡霊が出現する下地を作るのを避けた「僕」の恐怖の現れである。ただし、事件からの十数年、亡霊は「僕」のもとに再来していない。その理由には「僕」の変化が考えられる。昔の「僕」は、「相手が素人なら、たとえ向こうが日本刀の真剣持ってたって別に怖かかった」が「今ならいちもくさんに逃げる」という。強気な過去と臆病な現在という変化は老いたからだろうか、それとも亡霊体験やその後の人生経験で恐怖

を覚えたからだろうか。「僕」はこのようにも語っていた。

なにかといえれば体制打破という時代だった。僕もまあそんな波にのみ込まれ(略)そういうのが正しい生き方だと思っていた。ま、若気のいたりというかね。(略)正しかったと中間違っていたとかじゃなくて、もう一度人生をやり直すとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。

当時の「僕」が「正しい」と思っていた行動は、「若気のいたり」というように今の「僕」は採用しない。むしろ、人生をやり直し反復するとすれば若い頃には反体制的な行動を反復するだろう。しかし、それから十数年後の現在はずうではない。体制打破しようとした「僕」は変質したのである。

そもそも、体制打破とは与えられた立場||内容ではなく成し遂げられるべき課題||実践である。日常的な体制は「僕」が好んだように反復によって構成されるが、反復は「表象||再現前化とは異なるからこそ」(8)、「もろもろのヴァリアントを伴って(略)ひとつの仮面から他の仮面に向かって形成され(9)」る。すなわち、反復は差異を伴い反復は仮面||偽装を継続し、差異の蓄積が反復の内実を変化させて「僕」を変容させる。未来も、反復であっても、それまでとは異なる差異があり、それが当初とは異なる帰結へ達着させる。反自分・他者的なものとしての亡霊は接触の初めに拒絶反応をひきおこすが、亡霊は取り込ま

れるに当たって受け入れ側を変形する。未来に向けて自分を開くことは、亡霊の到来を受け入れるべく備えることである。生きることとは亡霊を馴化させ新たな習慣を身につけることでもある。「僕」は体制に抗って自己形成しつつ、少しずつ体制を受け入れて変化・変質する。そうした変化を自覚しているからこそ、現在の「僕」は「その頃」と「今」を対比し、当時の振る舞いを「若気のいたり」と概括するのである。現在の「僕」は体制の中に組み込まれている。それゆえ、現時点では、体制側の圧力の像としての「僕」が亡霊として現れる条件はない。

八 おわりに

かつて避けていた体験談を今再び語るのは、以上の変容によって「僕」には亡霊が到来しないことを確認し、それまで囚われていた恐怖を克服しつつあるためである。そして、亡霊は話の場の若い聴き手たちにも到来しうるものとして語られる。

全作品で追加された「人間にとつて、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか？ 君たちはそう思わないか？」という記述は、二項対立とその通底という『鏡』のフレームに従えば、「人間」には日常のアイデンティティとは相反するアイデンティティのバイザー的な現れである「自分自身」があり、それは「僕」も、話の場の「みんな」も同様なのである。反体

制的な「僕」は体制の亡霊の脅威に怯えて生き続け、いつしかそれを受け入れており、この点で「僕」は亡霊と同化したとも言えよう。また、亡霊の到来を話の場の聴き手たちに教える「僕」は日常のアイデンティティとは異なるものがあることを教える点でも亡霊である。「僕」という語り手によって亡霊の存在に気づかされた「みんな」はこれから亡霊と対面せざるを得ない。また、境界は体制／反体制だけではないのだから、かつてとは異なる亡霊が「僕」のもとにも到来しうる。語り手の亡霊たちは、こうして到来する機会をうかがい偏在することになる。「鏡」はそうした亡霊の憑在論をめぐる物語である。

(1) 『トレフル』一九八三・二、『カンガルー日和』(平凡社一九八三・一、講談社文庫一九八六・一〇)、『村上春樹全作品1979-1989・5』(講談社一九九一・一)。本稿での引用は文庫版による。

(2) 「不在の鏡／不在の僕をめぐって」(『遊卵船』二〇〇四・六〇) 一三五頁。本稿は多くを氏の論に負っている。

(3) 千国徳隆「村上春樹「鏡」をめぐる冒険」(『国語展望』一九九五・六〇) 三〇頁。

(4) 渡邊正彦『近代文学の分身像』(角川書店一九九九・二) 二〇一頁。

- (5) 前掲石橋論文一三二頁。
- (6) 鎌田均「小説として読む」ということ」(『月刊国語教育』二〇〇五・二) 五七頁。
- (7) ルイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」(『アルチュセールの「イデオロギー」論』三交社一九九三・二) 参照。
- (8) 佐野正俊「他者」からの遁走」(『月刊国語教育』二〇〇〇・七) 五七頁。加藤義信「村上春樹の小説にみる鏡像体験の諸相」(『あいち国文』二〇〇七・七) も同様に「他者」として捉える。
- (9) 「僕」が複数の行為体の集積とすれば、反体制の不徹底さを立て直すべく反体制的な亡霊もまた現れると言えよう。この場合、反体制的な世界へと「みんな」を「僕」は誘うことになる。ただし、「僕」の人生の歩みは、そうした反体制を強化する方向には進んではない。
- (10) 杉山康彦「鏡の怖さ・存在の恐れ」(『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ) (右文書院一九九九・七) 四五頁。
- (11) ジャック・デリダ『アポリア』(人文書院二〇〇〇・四) 七二頁。『アポリア』では「着来者」であるが、境界再考の機能の点で「亡霊」概念と同様に捉えられる。

- (12) 前掲『アポリア』七二頁。ただし、本稿の論旨にあわせて引用はニコラス・ライル『ジャック・デリダ』(青土社二〇〇六・一二) 二二五―二二六頁の訳を使用した。
- (13) 「意識の反転」(『群系』一九九八・二) 三二頁。
- (14) 「村上春樹」鏡」(『国語教室』二〇〇二・二) 参照。
- (15) 原善「村上春樹」鏡」が映しだすもの」(『上武大学経営情報学部紀要』二〇〇〇・九) 六三頁。
- (16) 前掲「村上春樹」鏡」が映しだすもの」六二頁。
- (17) ジル・ドゥルーズ『差異と反復・上』(河出文庫二〇〇七・一〇) 六二頁。
- (18) ドゥルーズ前掲書六〇頁。
- 付記 本稿は、教員免許状更新講習「短編小説解釈の方法と実践」(愛知教育大学二〇〇八・八・二二)で行った「鏡」分析を活字化したものである。

(平成6年修了・愛知教育大学教員)